高校野球

四国100年物語 13

1951(昭和26)年

朝鮮戦争による特需が続く中、9月に第2次世界大戦を終結させるサンフランシスコ対日講和条約が日本と米国、英国など連合国の間で調印された。

甲子園球場の内野スタンドを覆う巨大屋根が「銀傘」として復活し、新たな名物となった。アルミニウム製で阪神電鉄が約8300万円を投じて完成した。以前からの「鉄傘」は戦局が深刻化し金属供出のために撤去されていた。プロ野球第1回オールスター戦が7月に甲子園球場で始まった。全セが2勝1敗で全パを下した。10月には元関脇力道山がプロレスデビューを果たした。

「何苦楚」の豪打・俊足

「怪童」中西太

学制改革にともない1948（昭和23）年の第30回大会から夏の大会は「全国高校野球選手権大会」と現在の名称になった。四国の代表校は南北2校となり、香川と愛媛は北四国大会、高知と徳島は南四国大会でそれぞれ対戦し、勝者が甲子園に出場することになった。空襲に焼かれ、荒廃から立ち直りはじめた敗戦間もない高松市で、後に「怪童」と呼ばれる選手が白球を追っていた。その豪打と俊足で甲子園を沸かせた中西太だ。

中西太は1933年、高松市で生まれた。野菜の行商をしていた母親の女手ひとつで育てられた。「人さまに迷惑をかけるな」という母の口癖が、後に野球選手として歩む人生訓となる。

敗戦の翌年、焼け残った高松一中（後の高松一高）の野球部に入部する。子どものころからスポーツ万能で三角ベースに夢中になっていた中西は、野球部でめきめきと頭角を現した。

甲子園には49（昭和24）年春と夏、51（昭和26）年夏の3回出場する。デビューとなった第21回選抜。中西は1年生ながら3番三塁手で甲子園の土を踏む。今ならば新1年生が選抜大会に出場することはありえない。実はその前年の秋季大会と四国大会にも高松一高併設中学3年生で出場していた。

「入学式も済ませていない高校1年生が、なぜ甲子園に出られたのか。学制の変わり目とはいえ、運命だったとしかいいようがない」。82歳になったいま、中西はそう述懐する。

甲子園での戦いぶりは、自著「人を活かす人を育てる」でも紹介している。

1年生で出場した選抜大会。1回戦は関西（岡山）に9―3で勝ったものの、準々決勝となる2戦目は名投手福嶋一雄を擁する小倉（福岡）と対戦。0―4の完封で敗れて甲子園を去った。

その夏も北四国大会を破竹の勢いで勝ち進み、選抜に続いて春夏連続出場を決めた。

49（昭和24）年の第31回大会。2回戦から登場した高松一は、水戸商（茨城）を6―4で下す。準々決勝でも芦屋（兵庫）を5―0で破った。準決勝の相手は、初出場の湘南（神奈川）。2点を先行された高松一は六、八回に1点ずつ挙げ延長戦に突入。しかし十回にサヨナラで負けた。

湘南は創部4年目ながら勢いに乗り決勝で岐阜を破って初優勝を果たす。この時の湘南の左翼手は、後にニュースキャスターとなる佐々木信也。三塁手は日本高野連会長になる脇村春夫だった。

翌50（昭和25）年夏、高松一は高松商に0―2で敗れ、甲子園出場を逃す。

51（昭和26）年、中西は主将になった。夏の香川予選、北四国大会は強力打線が爆発し、2度目の夏となる甲子園行きを決めた。

1回戦は岡山東と対戦。のちに大洋ホエールズで活躍する秋山登―土井淳バッテリーから中西は大会第1号本塁打を放ち、12―3で大勝。2回戦は福島商を2―0で下す。発熱をおしてランニング本塁打を打ったエピソードは自著に披露されている。準々決勝では芦屋を6―2で破った。

準決勝の相手は平安（京都）。0―4で迎えた九回裏、敵失を足がかりに中西の二塁打を含む3安打で1点差に迫り、2死満塁。だがあと一本が出ずに惜敗した。

「九回のあの二塁打が、エンタイトルでなければ、少なくとも同点にはなっていた」と中西は今も悔しがる。

当時、朝日新聞記者で、後に「学生野球の父」と呼ばれる飛田穂洲は「中西の強打が左翼手の頭上にうなり（中略）1点を残したまま平安に名をなさしめるという壮烈な敗戦ぶりだった」と8月19日付の紙面に戦評を書いた。

この大会で中西は2本のランニング本塁打と2本の二塁打を放ち、怪童の名をほしいままにした。

中西を「怪童」と呼んだ名付け親は誰なのか。

「うーん、飛田穂洲さんか野球評論家の大和球士さんなのかわからない。浪商のエース尾崎行雄（元東映）も怪童といわれたから私は初代かな」と中西は笑う。

同窓会にこまめに顔を出す中西は、後輩から「太っさん」と親しみをこめて呼ばれる。高松一の野球部OB会長の伊藤良春（61）は「えらぶらずに気配りがこまやか。四国が生んだ最高の野球人のひとり」と評する。

サインの色紙を差し出されると書く言葉がある。「何苦楚」。義父であり野球の師だった三原脩のノートに残されていた言葉だ。

中西は「何事にも汗を流し、努力して人生の礎をつくる。私の野球人生を凝縮する言葉で、その原点は高校時代だった」と振り返った。

（敬称略）

（佐久間泰雄）

「何苦楚」と書いたサイン色紙を持つ中西太さん＝東京都渋谷区初台

1951（昭和26）年の第33回大会に出場した高松一の選手たち。前列右端が中西太さん＝阪神甲子園球場

「何事にも汗」高校時代培う

西鉄の黄金期支える

高松一高を卒業した中西太さんは、1952年に西鉄ライオンズに入団する。その年に新人王を獲得。飛距離のある本塁打で人気選手となり、西鉄の黄金期を支えた。4年連続を含む本塁打王5回、首位打者2回、打点王3回、最多安打2回。MVPに選ばれる56年に西鉄の三原脩監督の長女敏子さんと結婚。ベストナインには通算7回選ばれた。29歳で西鉄監督を兼任し、63年にリーグ優勝を果たす。69年に西鉄を退団後、ヤクルト、日本ハム、阪神、近鉄、巨人、ロッテ、オリックスの7球団で監督、代理監督、コーチとして指導した。「コーチの仕事は『つくる』こと、監督の仕事は『決断する』こと。私の天職はコーチ」と自負する。99年に野球殿堂入りを果たした。現在は日刊スポーツの野球評論家。

西鉄―巨人の日本シリーズでの長嶋茂雄選手と中西太選手（左）＝1958年、後楽園球場

母校に記念コーナー

2000年に高松市民栄誉賞の第1号受賞者となった中西太さんは、野球ゆかりの資料49点を高松市に寄贈した。高松一高（同市桜町2丁目）の「中西太記念コーナー」には、1956年の本塁打王のトロフィー、57年のオールスターゲーム優勝記念盾が展示されている。残りの寄贈品は来年オープン予定の「高松市こども未来館」（仮称）の1階市民交流ゾーンに展示される。西鉄時代の背番号6のユニホーム、日本シリーズ優勝ペナント（1958年）など約40点のほか、当時の映像で活躍の軌跡を振り返る。

◇次回（4月21日）は「優勝旗を巻く優勝校」（土佐）です。この連載は原則として毎週火曜日に掲載し、計35回程度を予定しています。記事を貼れる「スクラップブック＆資料集」を定価200円（税別）で販売。お近くのASAでお買い求めください。